馬産地ライター村本浩平の

2020 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑

Vol.3 8.4[火]▶9.24[木]開催分

8.12[水] アメリカンペイトリオット賞
【フルールカップ[H3]】

父War Front、母Life Well Lived(母の父 Tiznow)の7歳馬。北米を中心に次々とGⅠウイナーを送り出した父War Front。その中でもアメリカンペイトリオットは芝のGⅠ(メイカーズ46マイルS)を優勝。また初重賞勝利となったGⅢケントSでは、トラックレコードを樹立としたスピード能力も評価される形で日本へと導入されてきました。War Frontの後継種牡馬の中でも芝適性の高さが評価されているだけでなく、牝系にシンボリクリスエスの名前もある血統背景もまた、生産者への信頼感となっているようです。繋養初年度となる2018年には154頭、2019年にも109頭の繁殖牝馬を集めており、好馬体も遺伝された産駒は、今年のセリ市場でも高い評価を集めることでしょう。

8.13[木] アニマルキングダム賞 新種牡馬
【エトワール賞[H3]】

父Leroidesanimaux、母ダリシア(母の父 Acatenango)の12歳馬。現役時はダートのG1ケンタッキーダービーに加え、オールウェザーのG1ドバイワールドCを優勝。芝でもG1レースで2度に渡って2着となるなど、馬場を問わない活躍を見せました。特筆すべきはその血統背景で、父のLeroidesanimauxはブラッシンググルーム系の種牡馬で、母のダリシアはドイツ産馬。現在は日本で繋養され、産駒のディープキングは今年のラジオNIKKEI賞でも3着に入着しています。先に種牡馬入りしたオーストラリアではGⅠ馬を輩出。北米からもグレードレースの勝ち馬が誕生しています。日本での産駒誕生前に輸入された産駒も芝、ダートと問わずに勝ち上がりを見せています。

8.27[木] ダンカーク賞
【リリーカップ[H3]】

父Unbridled's Song、母Secret Status(母の父A.P. Indy)の14歳馬。父は北米のリーディングサイアー、母も現役時はGⅠ2勝を含む8勝を上げた名牝という良血馬。現役時は5戦2勝ながらも、GⅠでは2度に渡って2着に入着しています。引退後はアメリカで種牡馬入りすると、初年度産駒からシャンペインSの勝ち馬Havanaといった活躍馬を送り出し、その年の北米ファーストシーズンサイアーで首位に輝きます。2014年から日本に導入。日本産まれの初年度産駒たちも、早い時期から活躍を見せていき、総合ファーストシーズンサイアーでは2位、地方では首位となる活躍を残していきます。産駒は高いダート適性を示している一方で、芝向きと言えるスピード能力も備えています。

9.3[木] パイロ賞
【サッポロクラシックカップ[H2]】

父Pulpit、母Wild Vision(母の父Wild Again)の15歳馬。父は北米のリーディングサイアーとなったTapitを始め、数々の活躍馬を送り出した名種牡馬。パイロ自身も現役時にはGⅠフォアゴーSを含む17戦5勝の成績を残し、現役引退後は日本で種牡馬入りを果たします。2013年にデビューした初年度産駒は、高いダート適性と仕上がりの早さを示していき、その年の地方ファーストサイアーでリーディングとなります。その後も産駒は地方競馬で毎年のように重賞戦線を沸かせていき、ついには昨年の地方リーディングサイアーの2位まで上り詰めました。中央でもビービーバーレルが芝の重賞を優勝と、今後は二刀流の活躍を見せる産駒たちが、更に種牡馬としての評価を上げていきそうです。

9.10[木] クリエイターⅡ 初年度産駒デビュー
【旭岳賞[H2]】

父Tapit、母Morena(母の父Privately Held)の7歳馬。2歳時は未勝利に終わったものの、3歳を迎えてから一気に才能が開花。GⅠアーカンソーダービーを優勝して、米三冠クラシック戦線に名乗りをあげると、最後の一冠となるGⅠベルモントSを勝利。その年の暮れには日本への導入が発表。3年連続で北米のリーディングサイアーとなったTapit産駒で、しかも、その年のクラシックウイナーの導入は生産界でも話題となりました。85頭の繁殖牝馬を集めた初年度産駒は今年デビュー。ホッカイドウ競馬でも産駒のリュミエールが、2着以下に8馬身差を付ける圧勝。自身の競走成績からしても、産駒たちも3歳を迎えて、距離が伸びてから更に勝ち鞍を量産していくことでしょう。

9.17[木] タリスマニック賞
【フローラルカップ[H3]】

父Medaglia d'Oro、母Magic Mission(母の父Machiavellian)の7歳馬。大きな流星に加え、4本の脚全てにハイソックスを履いたような白斑と、インパクト抜群の外見をしているのがタリスマニック。その競走成績も華々しく、世界各国を転戦しながらGⅠブリーダーズCターフを含めて、重賞で3勝をあげています。父のMedaglia d'Oroもまたワールドワイドかつ、条件を問わずに重賞馬を送り出すスーパーサイアーですが、タリスマニックが得意としたのは芝のレース。しかも中距離からクラシックディスタンスで安定した成績を残しました。今年、日本で誕生した産駒もまた、父と同じような舞台での活躍と、その派手な外見が遺伝されていることを期待したくなります。

9.22[火・祝] ホークビル賞 新種牡馬
【ウポポイオータムスプリント[H3]】

父Kitten's Joy、母Trensa(母の父Giant's Causeway)の7歳馬。デビュー3戦目となる2歳未勝利戦で勝利をあげると、そこから破竹の6連勝でG1エクリプスSを優勝。芝のグレードレースで活躍を続け、5歳時のドバイシーマクラシックでは、日本から遠征してきたサトノクラウン、レイデオロなど退けてG12勝目をあげます。特筆すべきは、芝の12ハロンで4勝をあげている競走成績でもあり、そして世界6カ国を渡り歩きながら好走を繰り返してきた、心身の強さではないでしょうか。欧州を代表する名種牡馬Sadler's Wellsの父系もその後押しとなった感もありますし、日本でもクラシックディスタンスを沸かすだけでなく、その雄大な馬格を受け継ぐ産駒が次々と出てきそうです。

9.24[木] シャンハイボビー賞
【イノセントカップ[H3]】

父Harlan's Holiday、母Steelin'(母の父Orientate)の10歳馬。2歳時のデビュー戦を勝利後、連勝街道をひた走りながらG2ホープフルS、G1シャンペインS、そしてG1ブリーダーズCジュヴェナイルを優勝。その年のエクリプス賞最優秀2歳牡馬にも選出された快足馬がシャンハイボビーです。4歳でスタッドインするとアメリカに加えて、ブラジルやチリでもシャトルサイアーとして繋養されます。北米のファーストサイアーランキングでは4位となっただけでなく、南米ではG1馬も輩出。しかも輸入馬のマリアズハートが、芝のスプリントで4勝をあげてオープン入りも果たすなど、日本競馬への適性も証明しています。産駒は父同様に早い時期からの活躍も期待できそうです。

今シーズンは
特別競走13レースも
「スタリオンシリーズ競走」
として開催!

- ●8/ 6[木]ベストウォーリア賞
- ●8/19[水]ヴィットリオドーロ賞
- ●9/ 1[火]エピカリス賞 新種牡馬
- ●9/16[水]エスケンデレヤ賞

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャパンブリーダーズカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産者に種牡馬の翌年種付権利を副賞として贈呈する競走です。※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。